

光明第二十一号 大正九年十一月

様

住岡 狂風

光明に！ 光明に！ 山であれ、坂であれ、幸であれ、禍であれ、刻一刻に、一日に一日に、今です、今です、今日です。今日の一日です。苦しかりうが、うれしかりうが、私の一日です。私の一刻です。うれしくても光明に、苦ししくても光明に。私の信仰の試練です。私の生活の感謝です。

今の私の感謝が、私の魂が認める光明が、それが私たちの全てです。坂にかかつても光明は前に、平原を通つても光明は前に、山又山その又山、いくつ越しても光明は前に、かくして、私たちは、生く日生く日を感謝します。

□ 貴女は、兄にさえ、貴女が今の様に働いて生きていることを恥と思わせました。今の様に、正しく真面目に、弱い者のために多忙な働きに、来る日来る日を使う貴女は、小さい名目に、寂しがらせる兄の方より、どれだけ立派な人でしよう。「光明輝く舟にはじめて救われたのです。」「運命の内に、新しき我が生命の芽をふくらましていただくことが出来ました。」「忙しい時の愚痴も今はよろこびと変りました。」というあなたの幸福を喜びます。

□ 君は、富がほしい、金がほしいと言いました。富を得なさい。金をつくりなさい。全ての人が富むことは、ひいて、国が富むわけです。富めば、公共につくされます。租税の負担が出来ます。病気の時にも思いきって養生が出来ます。勉学の資本となります。人の厄介になるかわりに、人を救われます。子供の教育が出来ます。お金をためなさい。そしてそれを、数多く使ったとき君ははじめて人なのです。

□ 私はあなたに申します。

「小さい恩に甘えて、大なる恩を裏切る勿れ。」と、(E君に)

□ 私は貴女に申します。

「汝、怠らんとするとき親を思え。」と、(S子様)

□ 私は貴女に申します。

「小さいあきらめは、大なる苦痛によって亡ぶ。」と、(I子様)

□ 私はあなたに申します。

「苦しきによって得る汝の経験は、何物にもまさる汝の至宝なり。」と、(M君)

巻頭の叫び

どうせ私たちは瓦のような人間です。金属なら鉄の様な人間です。瓦なら瓦でもいいではありませんか。浜にころがる砂一粒にも、なくてはならぬ理由があります。谷に咲く名も知らない小さな草花さえも、とても人の手には作られない美しさがあり、育つ生命があるではありませんか。それに私たちは、瓦の様につまらないにして、金の様に高貴な価はないにして、私たちは人間です。母の体内から生れ出た時、オギャの声は、ああその一声は、「私は人間だ。」という久遠にひびく、力強い人生肯定の歓喜の叫びではありませんまいか。

平凡でもいい。瓦でもいい。私たちは人間です。為さねばならぬ務めがある。育てねばならぬ生命がある。私一人の世界がある。私たちの社会がある。

つまらぬ様でも瓦一万揃ったら、大厦高樓雨はもらない。そのたつた一枚ねじれていたら、雨の降る日を何としよう。千円出した床柱も瓦一枚宛取り去つたら何で千円の価が見えよう。一片の鉄はつまらなくても、集めたら何万トンの軍艦も出来る。指一本が痛んでも、頭が平気でいられようか。それに、私は人間です。

心は、天上に馳せて、神をも見ます。一念凝れば岩をも通します。親にとっては、この上ない宝です。兄弟にとつては柱です。子供にとつては、たつた一人の親であり、国にとつたら守っている城であり、陛下の御ためには手足である。

おお、私たちは人であつた。なくてはならぬ人であつた。辛いにしてろ苦ししいにしてろ、私たちは人であつた。砂粒一つにもなくてはならぬ理由があるのに、私たちは人であつた。たつた、それだけでも私たちはうれしくないか。

私たつた一人のために、み国に雨をもらしてはならぬ。私一人がねむつておればそれだけ、世界はねむつて来る。私一人が、悪いなら、人類全体が悪くなる。

一瓦なら瓦でいい。立派な瓦なら、悪い腐つた柱よりましである。鉄なら鉄でもいい。鍛えあげたら、正宗の名刀にもなれるのだ。人々よ、同胞よ、私たちは、人間たることにおどろくではないか。もうこの上の問題は、働いているかどうかということのみだ。

改造の火の手

□ 文化は破壊と建設とによって進んで行く。人間たちによって用のないもの害になるものは改造せねばならない。今や改造という言葉がどこにも聞える。人間が太平の夢にただ現実の幸福に酔っている時は、とかくよどみが出来来る。無批判に暮す。けれども、人間たちの上にその大平の夢を醒ます様な大波が打ち、震天動地の大異変に出遭った時、人間たちは、体も心もひきしめて、真面目に、私たちの生活を批判する。そして、新しく、大きなものを求める。

改造がいる。改造がいる。教育にも、宗教にも、政治にも、道徳にも、実業にも、全てに改造が必要だ。

□ 固い殻を破って、そうだ。長い間無批判的に守って来た伝統精神のすたれた形式。物質を主眼に於て出来あがった文明の弊害、全ての矛盾、全ての因襲、全ての虚偽、全ての圧制の殻からぬけ出して、人間本然の輝きを見よ。汝自身の真実の叫びを聞けよ。みな一度自分の内を見つめて、真我の叫びに目覚めよ。それが改造の根本なのだ。

□ 今日のは村の祭である。雨の中を宮に参った。

宮の中には、役場の人が数人、その他に、ほんの五、六人の人がいる。祭は何のため祭だろうか。昨日の夕方、祭客が上へ下へと織る様に通った。魚屋は走り歩いて、魚を配った。だがしかし、祭は、何のための祭だろうか。人間は、長い生活の内々に精神をなくしてしまふ。祖先の祭を外にどこに祭があるう。魚も客も末の末だ。昔は祖先の祭は、氏の大切な仕事であった。その家に関係のある人たちは、皆集まって、氏の神を祭ったのだ。それが、今は、酒のみ、御馳走をする日になってしまった。精神の廃れた形式、それが即ち矛盾の生活なのだ。意味のない矛盾の生活は、そればかりではない。人間の生活に充ちている。

□ 人間たちの虚偽の生活よ。薄片な生活よ。上すべりの生活よ。陥穽の生活よ。争鬪の生活よ。てんぷらの様な生活よ。ごまかしの生活よ。私たちは飽いた。嫌になった。私たち目覚めんとする者の生活はそんなものではない。私たちは人間にあたえられた真の人間味を味わいたいことだ。私たちが自由に、大きく育てたいことだ。今の様に血眼になって同胞を虐げ、同胞を殺す、悪い者勝ち、強者勝ちの生活には飽いたのだ。

人と人とは毎日遠ざかって行く。金の世の中、物の世の中、人たちは、唯わけもなく、金に走る、名譽に走る。飢えた狼のように、一人一人が敵になって、町も村も、戦いの世の中になった。私たちは、愛する一人の隣人をすら持つことを宥されぬ。私たちは、排斥と、猜疑と、戦いの修羅の巷を呪うのだ。

□ 私たちばかりではない。今の世の中を嫌がる者は、一ぱいにみちている。改造の叫びはそこから生れるのだ。

武者小路氏の様に、日向の田舎に、「新しい村」を立てて、この虚偽の世界、病的な世界からはなれて、大自然を出発点にして、人間のほんとの生活に立ちかえろうとする人さえ出来る。けれども万人が皆、ペンを棄て、算盤をすて、槌をすてて、村にかえり、自然を相手の農業や労働に進むことは出来ない。私たちには、この世の中に立って、真に人間らしい生活に進むことは与えられないだろうか。

□ 人よ目覚めよ、と説く宗教団体も固い固い殻が出来た。そしてそれから一步も出られなくなった。宗教も老いた。今の宗教家の内の何割が、人生の根本にふれた基調に立って、まず自分が救われてその歓びを万人に分けようとする人なのだろうか。

キリストのいわゆる「独りで祈り」得る者がどれ位あろうか。金を集めて出せば位が上がる。何時までも人間は金ピカの衣に涙を流して拜むだろうか。今のままで進んだら大方の宗教は葬式道具としてのみ残るだろう。ある中年の説教師は「僧侶などになつてしまいました。ほんとに馬鹿げです」と。何という哀れさだろう。何故に、衣も袈裟も捨てて、虚偽の生活からほんとの仏の道に進み得ないのだろうか。講座の上で如何に声は枯らしても、同行に何の共鳴があろうぞ。大谷光瑞師を見よ。法統をついで活仏の法主たるべき人が、何物をも棄てて、一個の大谷光瑞となつて、海外に走っているではないか。日に日に寺からはなれて行く者は青年たちばかりだろうか。宗教も殻をやぶらねばならぬ日が来た。

□ 自分の周りに、人爵をつけて威張つた人間も、巨万の富をつんで豪傑ぶつていた人間も、自分の身に、威厳とか、見識とかをつけて、重そうにしていた人間も、大きな目で見たら、全て、それらを打毀して、たった一個の人間にまで引きおろして赤裸々な一人格としてのみ、その価値を定められる。

大臣が詰襟の洋服を着る。町に山高帽が減る。二等にのらないで、立派な神士が三等に乗る。シルクハットが人の価値ではない。三等に乗つても神士は神士だ。そうだ、人間の価値の定め方が違つてきた。昔は馬鹿でも家老の息子ならえらかつたのだ。明治時代は、華族の息子なら、金持ちの旦那なら、賢かつたのだ。けれど今日では、大工でも、左官でも、百姓でも、教員でも、車掌でも、大臣でも、ただその人がほんとの人間であつて、正しく働いて人類のためになつてゐるなら尊いのだ。人をきめるのに、位や金や、家柄できめたのが、今は、社会の文化（学問、政治、教育、産業、芸術、宗教等、人類生活の全体）の創造に如何につくしているかということにあるのだ。

文化の創造に役立つとするなら、まず、私たち一人の生活が創造でなくてはならない。「人間」といえば、不断一刻の間もなく、新しく、作つて行く動物なのだ。私たちが、私たちを精一ぱい育てて行く、それが、世界の文化を進める理だ。私には、人には真似ようとして真似られないたった私一人の世界がある。私一人の力がある。たった一人の世界を出来るだけ広くするのだ。私一人の力を十分あらわすのだ。そ

して、その力で世界を少しでも善いものにする。美しいものにする。正しいものにする。聖なるものにする。それが、私の真の生活なのだ。

私の価値は、ここにのみ見出される。位や、富や、名誉がついても、それは私たちの目的ではないのだ。又それが価値でもないのだ。

哀れな者は、物質を追うて戦わんとする人たちだ。自分の周りに殻を作つて、守つている人だ。目覚めるとは、目的を取りかえることだ。怠惰から救われて、努力を、私たちを育て世界を進め同胞を益することに使うのだ。

□「古に復る」ことも、時には、改造の意味になる。トルストイは、キリストの愛を地上に復活させようとした。「人間よ、自然にかえれ。」と言つた。「額に拝しなければ食つてはならない。」と言つた。そして又「人々よ、嬰兒の様になれ。」と言つた。型にはまつた、精神のすたれそうな耶蘇教を見て、自由を失い愛を墮落せしめた人間の世界を見て、キリストの徹底的愛にかえろうとしたのだ。トルストイのついた鐘の音は弱そうであつた。けれども、世界中にかなり強くひびいた。もちろん日本にも。

親鸞は今の寺の人たちとは違つていたようだ。徹底した願いと、徹底した祈りがあつた。「親鸞の昔にかえろう。」「私は今の教団からはなれて、親鸞の直きの声を聞く。」といった様な人が増えて来たのはうれしいことだ。今や、日本は、日蓮の帝国主義から、親鸞の人道的愛の思想に移つて来た様だ。

親鸞は言つた。「親鸞は弟子一人ももたない。私の力で仏にするのなら師匠でもあろう。弟子でもあろう。み仏の働きて仏になる者に、何で師匠があろう。弟子があろう。縁があれば共にも暮そう。縁がなければ別れましょう。私にそむいたとて、はなれたとて、何で仏になれないことがある。弟子があるなど思う者は、如来の慈悲を我がものがおに、とりかへそうとする心か。」（歎異抄第七節）

親鸞すでに、人間を一個の全人格として認める以外に、何物のへだてもおいていない。ともすれば、先生顔のしたい、物知り顔のしたい、私たちの心が恥ずかしい。

□この世を飽いた、呪つた人たちが、その昔、高野山や、比叡山に逃れて、精進と苦行と研究とによつて救われようとした。親鸞は、極楽世界を、山の奥から谷の間からひき下して、町の中に、村の中に立てたのだ。ちょうどその様に、「新しい村」の人たちは、都会からのがれて、人間生活のほんとかえろうとするのだ。けれども、全ての人が世をのがれて、自然にかえることは出来ないことだ。私たちは、村の中に町の中に至るところに、私たち新しい人間が、人間と人間とかみあつたり、陥しあつたりしないで、全てを棄てて全てを得た新しい生活、人の愛と愛とがだきあう温かい生活を立てねばならぬ。

私たちの飢えている霊と霊との温い交りによつてつながれたなつかしい生活に進まねばならぬ。

そんな理想の実現は出来ないと笑えば笑え、勝手にしてくれ。

私たつた一人、そしてあなた、三人、四人、十人、私たちは進んで行くのだ。同胞たちよ。私たちはその悲壮な門出をしなければならぬ。

我が国には、特殊部落と言われ、新平民と言われ、穢多と言われる人たちがあつた。何時かの米騒動も多くはそれらの人によつておこされた。

地震は地殻の弱い部分からおこる。千丈の堤も蟻の穴からとか、これは日本国家の弱味だ。長い間の因襲は、あの人たちを別物扱いにした。卑しい者にした。血族結婚を続けたための弊害や、彼らの作つた不潔や卑しい風俗やのために、社会の下層に沈んで来たのだ。けれども彼らも人だ。日本の国民だ。君につくし、国につくすことにどれだけ違いがあろうぞ。

如何に学問しても、出世しても、あれは穢多だと言われた時、彼らは一切を失つた寂しさに泣かねばならない。同じ国民で、同じ様に戦場にも立ち、国家のために尽くす人たちに何という気の毒だろう。

彼らの部落を救い、改善し、向上せしめて、彼らの人格をみとめなければならぬ。彼らにも、「日本国民だ。」という自覚を求め、部落を改善せよと言う前に、明らかならぬ天日を拝ませ、一般国民が彼らの人格を重んじ、そのいじけた根性を取り去つてやらねばならない。彼らの内にも天才があつた。自由に育てたらどれ位立派な人があるかわからない。

一生を日蔭者として生きねばならぬあの人たちのことを心から思いやる時、何とも言えない寂しさが浮ぶ。何も知らないで、人間として生れて来て、何も知らずに育つていく魂に、「お前は穢多だ。」と宣言された時、それがもし、私たちがあつたら何となく悲しさだろう。新しい私たちは、あの人たちに心から同情せねばならぬ。卑しむ感情を棄てねばならぬ。

□ 労働が神聖だということは、昔から言われて来たことではあるが、「額に汗して食べ。」の叫びは、全ての主義、全ての哲学、全ての運動の中心となつた。「人間皆労働主義」も近頃問題となつた。私たちは、労働という意味を、私たちが、頭を使つても体を使つても、とにかく、私たちを使つて、何かより多く人間生活のために働いていけるなら立派な労働だと言いたい。ロシアのレーニンの言う様な人間皆労働主義がいかに悪いかはしばらくおいて、私たちが人間の生活には、労働は愈々必要であり、益々光を輝かせなければならぬ。

生活の向上に、創造に、汗より以上に大切なものはない。私たちは、若い人間が、貯金の利子や小作米で、ブラブラ暮しているのを見て、羨望んだり、それを誇つたりする時代から遠ざかつたのだ。私たちは、宿帳に無職と書いて自慢そうにしたり、近代文学の上面をかじつて、働くことを知らない、青白い手足の持ち主たちに、もつと生活の意義を知らせなくてはならないし、そんなものを社会から逐わねばならぬ。そして又、私たちが、いやしくも、社会有用の働きをなしている以上、「私たちは、百姓だから」とか、「私たちは何だから」とかきもしい思いをしたり、自ら卑しんだりする必要はない。自ら生き得る幸福をよろこびつつ、大道を平気で歩まねばならぬ。

□ 一本の菊について考える。蕾のついた一本の菊は、そのまま一個の完全であり、開きはじめて一本も又一個の完全である。咲きほこつた一本も亦一個の完全であ

る。このことは私たち人間にも言える。私は私で、今のままが一個の完全なる世界でしよう。十歳の子供もまたそれ自身一個の完全世界である。ただ発達の種類と形式を異にするばかりだ。

従来の教育は、家庭に於いても、学校に於いても、教えられるものを一個の完全と見る、言いかえると、人格者として見ることが足りなかった。故に、教えるとは知らしめることだと考えた。けれども、今日の主意的教育では教えるとは知らしめることではなくて、為さしめることであり、彼らの生命の創造をうながすことだ。教育改造はここから行われる。親にしても教師にしても、教育は、生命と生命のふれあいである。人格の人格に対する感化である。その間には、温い一脈の血が流れていなければならぬ。

私たちの生命の輝きが、彼らの生命を育て、彼らの各々がもてる特殊の世界を見出さして、為さんとする意志を導くことが私たちの仕事でなければならぬ。(師範の同胞たちに)

(「改造」については、原稿の三分の一も書いていないが、紙数の都合で仕方がない。これでおく。)

仏（神でもよい）を信ずる人と信じない人との話

狂風 「ああ燭が消えましたね。ロウソクをつぎましましょう。あなたのおっしゃることは、私は皆そのまま受け入れることが出来ます。そうです。私たちは、心の持ち様がわるくて、わざと自分を苦しめていますね。」

△△ 「先生、私はいつも『善意にとれ』とそればかり考えています。人にも語っていません。私たちが善意にとりさえすれば、たいいてい腹の立つことはありません。女、そうですね、大概の女は、何事によらず、悪意にとつていけませんね。私たちには何でもないことが女には大問題になりますからね。多くの女は、自分の持つ感情に苦しんでいます。夏の虫の様に、自分で自分を焼いて苦しんでいます。女子の教育には困るとのお話、ほんとにそうです。二三人相手の家庭でも困りますもの。」

狂風 「世の中の多くの面白くない問題は、善意にとることの出来ない女の感情がもとで出来ることが多いでしょう。私は女が、執念深い蛇の様な感情をもてあましているのを見ると気の毒になります。『善意にとる』あなたはそれを実行していられます。幸福なことです。世の中の女たちにももつと善意にとることを実行させたいですね。夫婦喧嘩などは、一方の心を善意にとらないのがもとでしょう。」

△△ 「私は小さい時両親を失いました。そして、弟と二人で叔父の家で育てられました。叔父は、それはそれは、厳格な男でしたから、随分苦しんだこともあります。食事の時でも、自分がもらって箸をつけたものは、みな食わねばゆるしてくれないのです。弟と二人で元日の朝、餅の注文した時に、勝気な弟は、たくさん言いましたので弱かった私までが、餅嫌いなのに、弟と同じだけ言ったのです。二人とも食うに困って、長い間かかって、泣きたい思いですませたことがあります。」

そんなに厳格でしたから、その時分には、随分親がいたらとひがみもしたものです。けれども今日になって見れば感謝しています。今日でも私が食事の時、皿ものを何一つ残したことはありません。その他のこともみなそのやりかたでした。今では、親の手で甘やかされて育てられた人よりも、私は幸福だとよろこんでいます。親のな人たちでも、心の持ち様一つでは、自分で慰められると思います。」

狂風 「人間は、鞭うつ心の内の温かみよりも、齒で墓を掘る間食のための菓子の方を有難いと思いますからね。辛いとき悪いとき苦しいとき、それを感謝する心になりましたね。あなたのおっしゃる通りです。心の持ち様ですね。とかく人間は、汗の出る血の出る恩恵よりは、近所の小母さんの小さい有難みを深く受けますね。つまらないことです。私はよく、強い人間になれ、と子供に申します。自分の作った酔った様な、薄片な涙をもつて、自分で苦しんだり、人からそんなものを与えられて感謝する様では、小さいものになってしまいます。人間には芝居気があります。そして、その芝居気で妙に人をひきつけるものです。教える立場に立ったとき、苦しい、辛い、

強い愛は悪意でとつて、小さい芝居気に走る様な子供が出来るとほんとに困るので。継母などに育てられる人たちにも、半分位はこの気分が子供にあるから面白く行かないのでしょうか。あなたの様に、率直に歩みたいものですな。」

△△ 「私たちが一緒になると、『私たちはほんとに苦しいですね。』と申します。私たちは苦しいのです。けれども私はこの苦しいのさえ、こんなにも思っています。私たちは、過去まへのよがあつたか知りません。けれど、因果などということがあるとすれば、毎日毎日苦しみに出会うごとに、やれうれしや、又一つ自分のしななければならぬことをすませた、又一つ罪の償いをつけた、と思えます。人が私を苦しめても、その人によつて、私の責任(?)をはたしたと思えば、やはり何だか恩人のような気がします。苦しいのは嫌ですが、苦しみもまた喜びです。」

狂風 「少し消極的なお考えかも知れないけれど、何という幸福なお方でしょう。いわゆる人間は何か意義がなくては生きて行かれないのです。苦しみもそうです。

苦しみが、感謝にかわるまでには、人は大分苦しまねばなりません。私もやはり苦しみの度に、寂しさの度に、喜んでいきます。私は苦しみに出会う度にいよいよ私一人の世界を明らかに見出される様な気がします。だまって、苦しみ苦しんでいるとき、私はほんとに、私人自身を見出して、何か大きな光にひきよせられた気がします。私は、どうも浮調子になつて騒いでいるときや、幸運がむいて来て、フカフカするときには、私の霊は、落ちつきを失つて、とかく傲慢になつて、思慮がなくて、何だか私自身を失つた様な悲哀を後から感じます。私は苦しい度に強くなれる様に感じます。私たちは、言う権利もあり理前もあるとき、私の思うほどを言つて、立派に勝ちたいのですけれど、やつぱり勝者の地位に立つた時は、何だか心の空虚を感じます。言いたい理前も言わないで静かに敗けていることは、辛いことですが、その後では、その苦しみが中身のある大きな喜びとかわる様な気がします。

私は近頃妙にうれしいのです。昨日の朝なども、三時半頃目が覚めて、何時もなら読書するのですが、何となくうれしくて、書物を読むのすら時間が惜しい様な気がして、寝間の中でビクビク跳る肉を我慢して一人で夜の明けるまで考えていました。そんなとき私は一人で口の中で『そうだそうだ。』とそればかり言っているのです。広い平野の上に、花の咲いた、陽の照っている時、一人で跳り出た様な気がするのです。」

△△ 「先生は喜んでおられます。何時も喜んでおられます。そして、辛い時にも消えてしまわない喜びです。そうです。自分一人でしか喜ばれない様な喜びは、小さい喜びです。家庭の者にも分てる喜び、世の人にまで及ぼす喜びでなくては、ほんとの喜びではありませんまい。普通の喜びは、苦しい時消える喜びです。」

狂風 「私の喜びなどそんなに尊いものでもないでしょうが、人に喜びを分けようとする者は随分とやはり苦しまねばなりませんね。あれごらん下さい。私たちの周囲に

さえ偽善者だ、いらぬことだと言う人があるではありません。その中に立つて精神の破産もしないで進むことは辛いことです。」

△△ 「その苦しさがまた喜びの種でしょう。どうせ善意を失った人間たちは何とも言うでしょう。その中に立つて、やはり苦しもうとなざる喜びは大きいですね。私たちの様に一人でしか喜ばれない喜びは小さいものです。」

狂風 「人は一人人を信じすぎますね。信ずるといふよりも人の好意をあまり無造作に考えて頼りすぎますね。私たちも人に頼りすぎて、度々馬鹿を見たり、苦しんだりしたものです。人に信じられたり理解されたりすることはうれしいことですが、自分から人に頼りすぎたり、理解を求めすぎたりするために、弱くなったり苦しんだりします。」

自分を正しく知らせるといふことは、誰ももつ欲ですが、それがために、つい人に頼りすぎたり、自分を言い訳することに日を暮す様になるでしょう。人間は、『自分がたった一人だ。』とそのどん底に立つたとき、案外自分の力も見えるし、自惚れもとれるし、動かない自分の生き方がわかる様な気がします。私たちも随分言いたいだけ言つて自分の明りを立てたかつたものですが、近頃少しは忍ばれる様な気がします。時には、私たちが人の身代りに罪をきる様なこともあります、それも意義のあることの様な気がします。けれども人にはやはり信ぜられたいですな。」

△△ 「先生のは信じてくれないと言われても他人のことです。私たちの様に、もう三人も四人も子供があつて、一生連れ添う妻が、自分を信じてくれないで小さいこともビクビクしてくれることは、先生にはわからない辛い問題です。」

狂風 「私たちのはまだ真実にふれていないかも知れません。親が子を信じない。子が親を信じない。夫が妻を信じない。妻が夫を信じない。それこそ人生一番辛いことでしょう。」

お互に辛い世の中ですね。けれどもこの辛さがなかつたら人生は楽なものでしょうね。私たちは、とても今日の様な幸福はなかつたでしょうね。」

△△ 「やれやれ長居をしました。もう三時間以上になります。今が十時ですか。まだ夕食がなかつたのですね。大分冷えて来ました。これで失礼します。」(十一月一日稿)